

報告タイトル

量的テキスト分析による現代中国研究：源流、再興、課題
Quantitative Text Analysis in Contemporary China Studies: The Development and
Challenges of an “Old-but-New” Method

氏名（所属）

林載桓（青山学院大学）
LIM Jaehwan (Aoyama Gakuin University)

要旨（800 字程度）

2010 年代以降、量的テキスト分析による論文が社会科学諸分野で増加してきたが、中国研究において同手法は「古くて新しい」方法である。本稿では、(1) 同手法を用いた初期の研究にあたる中国研究の存在と、その後の相対的縮小、(2) 近年の増加の量的把握とその特徴、(3) 同手法による主要な応用例、(4) 更なる可能性および課題を検討する。本稿では、まず冷戦期のデータの制約下で同手法が採用された背景と、1980 年代以降の新たなデータ環境の下で同手法が下火となったことを確認する。次に 2010 年代以降に採用例が急増していることを論文データから示し、その特徴をデータと手法の面から明らかにする。そして近年の代表的研究を取り上げ、貢献の度合いに濃淡があるものの、一部の研究が検閲と情報操作をはじめとする中国の権威主義体制のメカニズムの解明に寄与してきたことを確認する。最後に同手法の可能性として機械学習の更なる応用と研究課題の多様化を見出す一方で、データ規制への対応や質的知見との接合といった課題に加え、地域研究との間には一定の緊張関係があることを論じる。